高山の文化を高めた人々〈1〉

「飛驒版画事始」版画を教えた二人の先生

江黒亮一

わが飛驒は版画の国などと世評は高いが、その創成期については諸説紛々、ともすれば我田引水の嫌いがあるが、飛驒の小学校で始めて版画を教えたのは大正九年（一九二〇）である。

当時、高山は人口一万八千の時代、学校は男女別、男子は三年まで馬場校、四年からは城山の校舎、私共五年生は三組あって、図画教育に特に熱心だったのが中村由平衛、間吉三郎二人の先生のクラスであった。

中村由平衛は、後の武田由平先生のことで日本の代表的版画家として成功され多くの人々に知られているが、もう一人の間吉三郎先生については殆ど知る人はいない。併し図画及び版画教育については、武田先生と同様大変熱心であった。この両先生は大変仲が良く、お互いの教え子の図画作品をパネルにして交換し合い、生徒に自由な批評をさせ、競い合ったりした。

大正九年は、第一回国勢調査の施行された年であったが、そのポスターを作らせたり、来年の年賀状を、干支酉年をテーマにして木版で作ることを初めて教えられた。当時はまだ版画とはいわないで、木版とか単に版と呼んでいた。版木はぶくりの歯板で朴の木、一般庶民の履物は下駄、ぶくりの時代。ぶくりとは木履いわゆる高下駄のことで、下駄の歯入れは立派な職業で、版木としても容易に入手できたが、刃物が問題であった。

切り出し小刀の他は普通洋傘の骨などを利用した。私は父が彫刻師だったので大変有難かった。原画から版木に転写の方法など先生の指導で初めて未知の世界にひたむきに挑戦した。

間吉三郎氏の版画

たとえ幼稚であっても、自分の創った画がそのまま版となって何枚でも復原出来ることに限りない喜びと感動を覚えた。

武田先生はこの年の夏、長野県で山本鼎の農民美術の作品を見て感動され、それが動機で生徒に版画を教えられたと言われているが、間先生と全く同じ時期であることは、間先生も山本鼎に触発されたものと思われる。

思い起せば、当時の服装は詰襟が普通であったが、二人の先生は背広ネクタイ姿で大変モダンで好もしく思った。

第一次世界大戦後の社会不安不景気のどん底、ロシヤ革命は大正七年、米騒動は大正八年、その翌年、飛驒版画は武田・間二人の小学校の先生によって創成されたのであった。

これ、「飛驒版画事始」の記である。